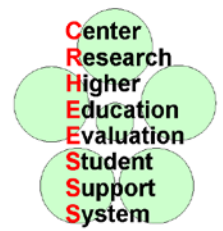


# 週刊センターニュース

No.285



第285号(2009年11月16日) 毎週月曜日発行  
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター  
URL: [http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou\\_rche/index.htm](http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm)

## ○●○ 第6回専門分野別教育開発セミナーのご案内 ○●○

テーマ: 「国際標準の大学教育 いかに関心の専門を英語で教えるか」

主催: 金沢大学大学教育開発・支援センター

共催: 留学生センター、外国語教育研究センター、国際学類、国際交流本部

後援: 大学コンソーシアム石川、独立行政法人日本学生支援機構(JASSO) 東海北陸支部

日時: 平成21年11月21日(土) 13時~17時10分

会場: 金沢大学サテライトプラザ3階集会室

趣旨: 政治、経済、理工学、医薬、環境など様々な分野でグローバル化が進み、厳しい国際競争下にある産業界も日本人学生と海外の学生を区別することなく質の高い人材を獲得しようとする動きの中で、大学教育の国際通用性を担保する英語で専門を教える授業は必須となってきている。大学院を中心に英語による授業は増加する傾向にあるが、国家戦略として「留学生30万人計画」が実施に移される中、今後は多くの大学で国際標準の英語による大学院教育を拡充させるとともに、学士課程教育における英語による授業の実施についても踏み込んでいく必要がでてくるであろう。

英語で教えることが大学教員の必須のスキルとなる時、いかに英語で授業を行ったらよいのだろうか? 英語での論文執筆や国際会議での発表に慣れている教員にとっても英語での授業は容易ではないであろう。留学生を対象としたクラス、日本人学生と留学生とが混在するクラス、いずれにおいても受講者間の英語力のばらつきは授業設計上の大きな問題となる。また、討論を組み込んだ授業の組み立ても課題である。

本セミナーでは、学内外より英語で教える授業を実践しておられる講師の方々から授業内容、方法についてご教示いただくとともに、教員の英語力以外の授業運営の部分について、すなわち英語による授業のFDの側面についても議論したい。

[プログラム] 13時~13時10分 開会挨拶

長野 勇(金沢大学副学長)、青野 透(大学教育開発・支援センター長)

13時10分~14時10分 基調講演「英語による授業のノウハウ共有」

中井俊樹(名古屋大学高等教育研究センター准教授)

14時20分~15時50分 学内事例報告

「外国人教員から見た英語による授業運営」Ertl John Josef(外国語教育研究センター准教授)

「環境をテーマとするジョイントクラスの実践報告」結城正美(外国語教育研究センター准教授)

「工学系大学院における英語による専門教育の実践報告」中山 謙二(自然科学研究科教授)

16時05分~17時05分 ディスカッション

17時05分~17時10分 閉会挨拶 志村 恵(留学生センター長)

※ 申込み方法: 電子メール又はファックスで、氏名(ふりがな)、所属、連絡先(電子メールアドレスまたは電話番号)を明記の上、下記までお願いします。

大学教育開発・支援センター(西山) E-mail: [nnishiya@ge.kanazawa-u.ac.jp](mailto:nnishiya@ge.kanazawa-u.ac.jp) FAX: 076-234-4172

## ○●○ 大学生の学びに関する研究調査紹介 ○●○

大学生の学習実態と大学の教育環境を明らかにし、そこから浮かび上がる問題をどのように解決していくかということは、重要な論点であることは改めて強調するまでもないが、先月ないし今月発行の2種類の専門雑誌『IDE 現代の高等教育』515号(IDE 大学協会)および『BETWEEN』231号(株式会社進研アド)(いずれの雑誌も当センターで定期購読・所蔵しています)において、上記のテーマに関わって、興味ある研究調査報告が掲載されていたので、その一部を紹介したいと思う。

『IDE 現代の高等教育』は特集テーマを「学習させる大学」(4-65頁)として、様々な論者が解説しているが、うち金子元久氏(東京大学教育学研究科教授)らが進めている全国大学生対象の大規模調査(詳細は<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump>)の結果分析にもとづいた主要な知見として次のものが挙げられる。第一に、出席率の高さとは裏腹に日本の大学生が授業外学習に費やす時間の絶対量が少ないということ(偏差値ランク・設置者による違いがあまりない。またアメリカの学生調査として実績があるインディアナ大を拠点とするNSSE調査結果と比べ、半分から3分の2程度の数値)、第二に、対象者の約4割が入学時点での明確な目的がなく、こうした学生が自律的に学習する能力を身に付けさせるため「学習させる」ことが重要であること、第三に、授業形態と学習時間との関係について、例えば出席重視の統制的な形態は、ゼロか負の効果を与える一方で、理解しやすい工夫をする授業や、レポートへのコメントや学生の発言重視など学生の参加を促し動機付ける(「巻き込む」)タイプの授業はプラスの効果を与えやすいということ、また学生もそうした工夫の必要性を強く求めていること、第四に、高校まで学習習慣を身につけていない学生を、工夫された教育プログラム(初年次教育含む)の実施等の大学ないし学部での努力で、学習させることに成功しているところもあること、第五に、ただ教員側の過度な指導(おせっかい)が逆に学生の依存度を高めることにつながる(自立型学生が育たない)傾向もあり、近年よく目にする面倒見の良さ(という指標)も程度如何ということである。

『BETWEEN』のBenesse教育研究開発センターによる「大学生の学習・生活実態調査」(20-25頁)によれば、高校で学習態度が形成できている者は、保健系(医薬歯学部)が最も高く、教育系がそれに続く傾向が伺えること、入試難易度と学習の構えに相関はあるものの、難易度の高い大学でも約4分の1の学生にそれが確立しておらず、逆に低位校でも4分の1程度は積極的に取り組んでいること、学習態度の確立が授業出席はもちろん、教育システム(カリキュラム等)や教員(専門性の高さや影響)への満足度にも影響を与えているといったことが明らかにされている。

学生(とくに新入生)の傾向・特性によって働きかけ方は当然異なってくるもので、学生の傾向に現状の教育プログラムが適合しているのかの検証は欠かせないものになっている。本学においても、「学習状況と学習成果に関する学生アンケート」など関連の調査はすでに実施されているものの、学生の学習行動についてのより体系的な調査(追跡的なパネル調査も有効である)と分析を進め、それに基づいて、学部・専門分野の特性や学生の特徴(高校までの生活態度・学習態度等)に応じたカリキュラムや効果的な授業形態、教員の役割はどうあるべきか議論をしていくべきであると考える。

(文責 評価システム研究部門 渡辺達雄)

## ○●○ アカサスポータルにFD・SDカレンダー掲載中 ○●○

アカサスポータル上にFDカレンダー・SDカレンダーを掲載しています。全国の大学や大学コンソーシアムによるFDフォーラム・セミナー開催情報(11月・12月開催)のほか、独立行政法人日本学生支援機構主催の各種研修会情報もあります。是非、ご活用下さい。